

走れ東北！移動図書館プロジェクト 本と人、人と人をつなぐ

写真・文 鎌倉 幸子
Sachiko Kamakura



お気に入りの絵本を見つけた女の子 (撮影：高橋智史)

■今、出会う本が人生の支えになる

シャンティ国際ボランティア会（以下SVA）は、東日本大震災が起きた次の日に、緊急救援のチームを組み、一五日から現場に入り、炊き出しや物資配布の活動を行った。スタッフが交代で現場に入り事業を回していく。私も四月上旬に、宮城県気仙沼市に作られた仮事務所に寝泊まりしながら、活動に従事した。

カンボジア事務所では図書館事業を担当し、内戦が終わった土地に建てられた小学校に図書室を作る仕事をしていたので、沿岸部の図書館がどうなっているのか気になったが、緊急救援時に図書館の活動はまだ先のことだと自分にいい聞かせていた。

二〇一一年四月五日、私は宮城県気仙沼市図書館の図書館員の方と話をすることができた。避難所での炊き出しの話になった時、「食べ物食べたらなくなるけど、本を読んだ記憶は残ります。だから…図書館員として本を子どもたちに届けたいんです。」と、一言つぶやいた。あれ、どこかで聞いた言葉だ。「お菓子は食べたらなくなるけど、本は何度でも読めるから好き」と難民キャンプでのカンボジアの女の子の一言だった。

続いて図書館員の方が「こんな時だからこそ、子どもたちが、今、出会う本が人生の支えになると思います」と静かに、でも力強く語ってくれた。古代エジプトのペバイ図書館の入口に「心の診療所」と書かれ

壊滅状態の陸前高田市立図書館



活動開始当初は車が手に入らず
軽トラックを使用し、巡回した



ていたそうである。食べ物から取る栄養が満たされてからではなく、並行して心の栄養も届けていくことが大切ではないか、と。

■被災した図書館

二〇一一年五月、私は岩手県沿岸部にいた。この年の冬は長く、五月にもかかわらず、なごり雪が舞っていた。岩手県では津波のために住宅だけではなく多くの施設が壊滅状態となる。図書館もそのひとつだ。県庁所在地の盛岡市に入り、レンタカーで沿岸部を目指す。北海道の次に大きい岩手県は移動にも時間がかかる。盛岡市から沿岸部

にある宮古市まで一〇〇キロ近く離れていた。宮古市から、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市を回ったが、一月半経っても取り除かれていない瓦礫の山だけが、そこに町があったという証になっているようで心が痛む。

山田町は図書館の建物は無事だったが、蔵書の三分の二にあたる倉庫に置いていた本が流出。大槌町、大船渡市三陸町、陸前高田市の図書館は壊滅状態で、建物はかるうじて形を留めているものの空っぽの状態。泥をかぶった本が投げ出された状態だった。

また、避難所を訪れた際、「ここには子どもがないのに絵本が何箱も届いた。本の活動をしている団体だったら、これを持って行ってくれないか」といわれた。避難所のなかには、届いた本が床をふさぎ、寝る場所を奪っている光景もみられた。ダンボールに入った状態では、読みたいけど触っていいのかわからないのが分らず躊躇されている方もいた。「避難所の本なのか、個人に届いた本なのかわからない。勝手に借りていって泥棒扱いされたら大変」という声も。本と人をつなぐ人がいて、初めて「物が生きる」と改めて感じた。

■覚悟と約束

「移動図書館は約束なんです。その覚悟がありますか」岩手県沿岸部の図書館担当者とお話をしていた時に、頂いた言葉だ。移動図書館は、決められた曜日と時間に行くことが大切。それが繰り返されることで、人々は信頼するし、安心する。そのためにイベント的な一回きりではなく、継続的に「約束を守る」ことが求められていた。

いろいろな世代が集う場所



陸前高田市の図書館の跡地でばったり会った新聞記者が「親を亡くした子どものそばにはいつも本がある」といつていた。テレビをつけても新聞を開いても親を飲みこんだ瓦礫の風景が目飛び込んでくる。そのなかで、違う世界に連れて行ってくれる本は、一瞬かもしれないが守りのような存在なのかもしれない、とも伝えてくれた。

移動図書館は本の寄贈ではなく、貸出を行う。東京では「読みたい本はあげたらいいのに」という声もあったが、それに反対したのは岩手県のお母さん方であった。「子どもがもう慣れしてしまうのが怖い。物を借りたら返す、皆のものだから大切に使う。非日常から日常に戻したい」と。復興までの長い道のりのなか、一過性ではなく、非日常から日常に戻る過程を寄り添いながら一緒に歩んでいけるような活動を目指している。

■走れ東北！ 移動図書館プロジェクト

「立ち読み お茶のみ おたのしみ」をキャッチフレーズに二〇一一年七月より、岩手県沿岸部の四市町約三〇の仮設団地へ移動図書館活動を走らせている。図書館車は本を貸出すだけでなく、車の脇にキャンプ用のタープを広げ、そのなかに机や椅子を並べ、利用者にはコーヒーなどの飲み物を提供し、自由におしゃべりができるくつろいだ空間づくりを心掛けている。移動図書館とイベントがコラボレーションすることで学び・楽しみの機会も提供している。また、移動図書館活動に加えて、常設の図書室を大槌町と陸前高田市に開設、仮設団地の集会場二五カ所にも本棚を設置するなど、いつでも本が借りられる環境を整備して



アフガニスタン事務所のスタッフが来日しおはなし会を開催



移動図書館の運行スタッフ集合写真

同会カンボジア事務所で9年間図書館事業の担当をする。東日本大震災後、岩手に入り、いわてを走る移動図書館プロジェクトを立ち上げる。現在広報課長と東日本大震災図書館事業アドバイザーを兼任。



親子で絵本の読み聞かせ



おしゃべりに花が咲くことも（撮影：高橋智史）



高台移転のことで、これからの生活を話し合う姿も見られる



紙芝居も積んでいる

いる。
本の貸し借りを通じて、仮設団地に住み将来に不安を抱えている人が、生活・復興に必要な情報を得ることで、生活の質を向上させ、不安を和らげることがでる。また、移動図書館が提供する交流の場・学びの場・楽しみ場の場が、知らない人同士、バラバラになったコミュニティをつなぎ、その結果、本から人、人から社会へと繋がることのできると感じている。
「育児書はありますか」生まれたばかりの赤ちゃんを連れ来たお母さんが訪ねてきた。一人目のお子さんを知り合いのいない仮設住宅団地で育てている。育児書を探しながら、自分の子育て体験を話すスタッフたち。その話を聞いていた一人の女性

が、「私も赤ちゃんがいるのよ」といって話の輪に入ってきた。「命をつなぐ」ための情報と人が出会う空間になり得るのが図書館である。
陸前高田市の教育委員会の方が、図書館に込めた願いとして「陸前高田市は空間を失った。子どもが夢を作り、大人が夢を語る場所：それが求められている」というお話を聞いた。「前に進みたいが、前がどちらの方向かが分からない」と仮設住宅団地にお住まいの方がつぶやいていた。情報を提供し、人と人が出会い、夢を作り、語る場所である図書館が、足元を照らす一筋の光を灯せるよう、雨の日も、雪の日も、晴れの日も、東北を走っていく。